

実践研究課題：新学習指導要領に対応した「高齢者」授業の創造

和歌山大学教育学部（被服学） 今村 律子  
（住居学） 村田 順子  
（家庭科教育・食物学） 山本 奈美  
和歌山県立熊野高等学校 上村 桂

## 1. はじめに

家庭科における少子高齢化への対応は、非常に重要な内容の一つである。学習指導要領の改訂により高等学校家庭科では、高齢化の進展に対応して、高齢者の尊厳と介護に関する内容を充実させるとともに、「家庭基礎」では、高齢者の生活支援に関する基礎的な技能などの内容を充実されることが求められている（高等学校学習指導要領解説 家庭編、平成 30 年 7 月）。

熊野高等学校では、2 年前から産業教育に関する地域共同型サービスラーニングとして、1 年生で学習した家庭基礎の内容を校外で活用する実践がある。地域の社会福祉協議会と協力して実施している生徒たちの「高齢者安否確認」活動の実態を学び、今後の本連携活動に生かすこととした。

## 2. 高等学校における高齢者学習の例

熊野高等学校は、ボランティア活動が盛んな学校であり、クラブ活動としてボランティアを行う団体（Kumano サポーターズリーダー部）がある。学童保育所での活動や障害児夏季保育ボランティア、そして高齢者の安否確認・健康チェックという活動以外にも、地域で開催される各種全国大会などへのサポートがクラブ活動として実施されている。

上富田町の人口は約 15,000 人であり、その中で安否確認が必要な世帯は約 3000 軒である。そういった世帯のなかで、高校生の訪問を希望する世帯 300 軒程度がこの制度に現在登録している。週 1 回のクラブ活動時（16:00～17:00）に、社会福祉協議会から職員 2 人が来校し、クラブ顧問の教員と合わせて計 3 人の大人が、3 台の車にクラブ員の生徒を 3 人程度ずつ同乗させ、それぞれ 4 軒程度の家庭を訪問する。生徒たちは、前もって決められた健康チェックリストを用いて、各家庭の高齢者と会話し、健康状況や家具固定の有無、買い物等の日常生活で困ったことがないかどうかを確認する。訪問を希望して登録する世帯が年々増加しているため、1 年間に 1～2 回程度しか同じ家庭を訪問できない状況であるが、訪問した高齢者は皆さん高校生が来るのを心待ちにしている様子がみられた。

高校生が高齢者世帯を訪問して確認した内容は、町政にも生かされており、まさに地域と共同した活動内容である。例えば、家具が固定されていないという回答を得た場合は、町が責任を持って後日家具固定を行う。スーパーマーケットの数が減少し、買い物に困るという状況を町長に訴えたことから、車による移動販売が実施されるようになったなどがあり、高校生が学外で実際に地域における高齢者の生活支援をしている好事例である。

今後、校内での学習内容と学外での活動との関連などについて検討し、高等学校家庭科の授業実践にどのように反映できるかを検討する必要がある。



写真 生徒らの高齢者世帯訪問例